

紀州湯浅の沿革

湯浅は、古代より熊野参詣において上皇や貴族が滞在する宿所であり、平安時代末期から勢力を誇った土豪の湯浅氏の本拠地として栄えました。

中世に入り、熊野信仰が武士や庶民の間にも広まると「蟻の熊野詣」と表現されるほど多くの人々が熊野三山へ赴くようになり、室町時代後半には、東部の丘陵地を通っていた参詣の道が西方の海寄りに移るとともに町場が発達しました。16世紀末期頃になると、熊野街道の町場の西方に市街地が開発され、江戸時代の寛文元年(1661)には、さらに西方に臨海市街地域が拡大されています。

近世の湯浅は、藩内有数の商工業都市として発展しました。漁業や漁網製造なども盛んで、近海から遠く九州や関東、北海道まで漁場を開拓していますが、最も特徴的なものは、鎌倉時代に伝来した金山寺味噌の製造過程から生まれたといわれる醤油醸造です。紀州藩の手厚い保護を受けて藩外販売網が拡張され、文化年間(1804～1818)には92軒もの醤油屋が営業していたといわれるほど、代表的な産業となりました。

明治維新後、藩の保護を解かれたことによって醤油醸造家は大幅に減少しましたが、近代においても湯浅は有田郡の行政・経済の中心地として繁栄しました。近代化に伴う新しい施設や道路・鉄道などの整備は主に旧市街地の周辺で進められたため、近世の形態を受け継ぐ町並みが、今も往時のまま残されています。



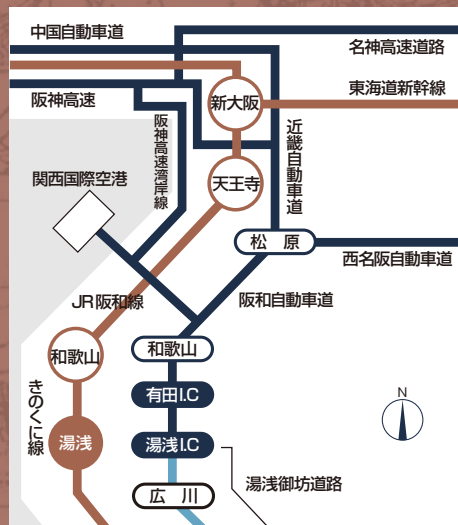
湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区の概要



保存地区は旧市街地の北西に位置し、東西約400m、南北約280m、面積にして約6.3ヘクタールに及びます。

16世紀末期頃に開発されたといわれる北町、鍛冶町、中町、濱町を中心とする醤油醸造業が最も盛んであった一帯にあって、『通り』と『小路』で面的に広がる特徴的な地割と、醸造業関連の町家や土蔵を代表とする近世から近代にかけての伝統的な建造物がよく残されている地区です。

醤油醸造など商工業を中心に発展した湯浅の町並みは、その重厚な歴史的風致を今日によく伝えていることから我が国にとって価値が高いと評価され、平成18年(2006)12月19日に全国初の醤油の醸造町として、国の『重要伝統的建造物群保存地区』に選定されました。



和歌山県湯浅町へのご案内

●お車での場合

大阪→近畿自動車道→阪和自動車道
→国道42号→湯浅
[約1時間30分]

阪和自動車道有田ICより約5分
湯浅御坊道路湯浅ICより約5分

●電車での場合

新大阪・天王寺→湯浅
[きのくに線(特急くろしお)]
新大阪より約1時間30分
天王寺より約1時間10分

JRきのくに線湯浅駅下車

■湯浅伝建地区に関するお問い合わせ先

湯浅町役場
地方創生ブランド戦略推進課
TEL.0737-63-2525 (代)

湯浅町商工会
TEL.0737-63-3535

お願い
◎町並みは生活の場です。暮らしている人への配慮をお願いします。
◎ゴミのポイ捨て厳禁! 美しい町並みづくりにご協力ください。
◎交通量の多い道では、安全に気を配りつつ散策してください。

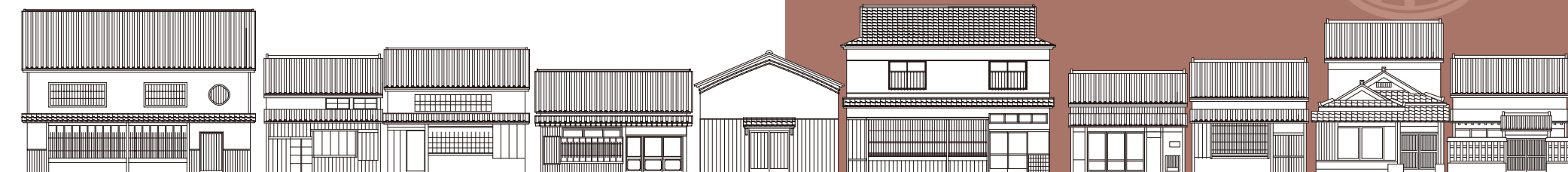
醸造の香りに生きる町

【湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区】

悠久の刻を経て今の時代に語りかけてくる
匠の技と文化が息づくまち



和歌山県湯浅町



1 大仙堀

醤油の原材料や商品が積み下ろしされた内港。石積の堀に建ち並ぶ醤油蔵など独特な景観を形成しています。

3 太田久助吟製

建築年代は江戸末期頃。元は醤油醸造家でした。現在は金山寺味噌を製造販売をしています。

4 加納家

大正10年建築。その時代に流行した黒漆喰仕上げの2階には、袖壁や繊細な木格子の窓など凝った装飾が見られます。

5 北町茶屋いっぶく

江戸末期頃の民家を改装した茶店。外観からは想像できない広々とした吹抜けの店内は湯浅の町家の特徴です。

6 津浦家

かつては醸造に用いる麹(こうじ)の製造販売店。主屋は明治11年の建築。

7 竹林家

長大な間口に6つの虫籠窓がずらりと並び、主屋は、古くは醤油と漁網の販売を営んでいました。

8 旧栖原家

明治7年建築の醤油醸造家の主屋は、全体的な構造から細部意匠に至るまで湯浅特有の様式をよく残しており、代表的な町家建築として位置づけられています。

お休処 立石茶屋

立石道標の対角に建つ江戸末期頃の町家を改修した休憩所。道町界隈では、ほかに木造3階建てや卯建(うだつ)、望楼状の3階があるものなど、趣向を凝らした個性的な建物が多く見られます。

道町の立石道標

糸我峠〜方津戸峠を越え、中世後期以降の熊野街道は湯浅で市街地を通過しました。街道筋に発達した道町にある天保9年(1838)建立の道標は、今も人々の往来を見守り続けています。

●北恵比須神社

埋め立て以前は浜に面していました。境内の石灯籠が文政6年(1823)に寄進されており、本殿も細部様式から見てその頃の建立と考えられます。

2 角長(かどちょう)

天保12年(1841)創業。慶応2年(1866)建築の職人蔵と醤油資料館には古い醸造用具や貴重な史料が展示されています。

11 甚風呂

江戸時代から昭和の終わりまで営業していた小路にあるお風呂屋さん。個性的な外観と建物内部を保存・復元し、往時の生活様式を伝える資料館として公開しています。

10 旧赤桐家

明治40年建築でかつては醤油醸造家の主屋でした。町家建築としては最大級の規模を誇ります。長さ5間半以上に及び虫籠窓や起り(むぐり)屋根が特徴です。

9 木下家

重厚な表構えの主屋は、広大な敷地を有した醤油醸造家の居宅でした。建築年代は江戸末期頃と考えられます。

虫籠窓(むしこまど)



●木瓜(もっこう)型

近世〜近代初頭頃の建物の2階に見られる窓で、格子を漆喰で塗り籠めています。単純な四角形か木瓜(もっこう)型に分かれますが、周囲に額縁を施した重厚なものなど、様々なデザインがあります。

格子(こうじ)



●手摺状の格子



●切子格子



●出格子

古くは、トオリニワ横のミセには取外し可能な高さ3尺程度の手摺状の格子、ミセオクの表には繊細な切子格子が建て込まれています。大正期以降になると長大な出格子が多く見られるようになります。

厨子(つし)二階と本瓦葺



●太田久助吟製

明治頃までは厨子二階と呼ばれる低い2階建て、2階部分は物置や使用部屋でした。年代が新しくなるにつれて建ちが高くなり、やがて総二階となります。屋根瓦は本瓦葺の伝統が大正期頃まで強く残っています。

幕板(まくいた)



●麹資料館

庇の軒先に下げられている木製の板を幕板といいます。これは、雨水や霧状になった雨粒が屋内に吹き込むのを防ぐためのものです。降水量の多い地域ならではの意匠上のポイントでもあります。

匠の技と文化を今に伝える町並み 歴史の意匠めぐり散策マップ 湯浅町湯浅伝統的建造物群保存地区



●モデルコースの所要時間	徒歩約8分	道町の立石道標	徒歩約1分	深専寺・大地震津波の碑	徒歩約3分	重要伝統的建造物群保存地区	徒歩約5分	岡正・北の町老人憩の家	徒歩約3分	北町ふれあいギャラリー	徒歩約2分	角長職人蔵・醤油資料館	徒歩約2分	大仙堀	徒歩約8分	甚風呂	徒歩約18分	JR湯浅駅
--------------	-------	---------	-------	-------------	-------	---------------	-------	-------------	-------	-------------	-------	-------------	-------	-----	-------	-----	--------	-------

●小路小路(しょうじこうじ)

通りを歩いていると、見過ごしそうな細い路地が家々の間から顔を覗かせています。これらは小路(しょうじ)または小路小路と呼ばれ、主要なものには名前が付けられるなど人々の暮らしと密接に関わっています。通りとは一味違った静かで懐かしい風情を体感してください。

●広域図より